

Title	バトラーにおける抵抗としてのパロディ：コーネルとの比較から
Sub Title	Parody as resistance in Butler's thought : compared with Cornell
Author	長野, 慎一(Nagano, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.57 (2003.) ,p.75- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000057-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バトラーにおける抵抗としてのパロディ

—コーネルとの比較から—

Parody as Resistance in Butler's Thought

—Compared with Cornell—

長 野 慎 —*

Shinichi Nagano

In both normative and descriptive senses, identity politics is sometimes regarded as typical as a style of resistance related to sex, sexuality, gender. On the other hand, there is another perspective that argues that identity politics has to be interrogated critically. Especially, some criticisms have been formed against discourses that advocate the return to essential identity, after publishing of *Histoire de la sexualité vol. 1* by Michel Foucault. This critical tendency has been accelerated in feminism and studies on sexual minorities after Judith Butler's *Gender Trouble*. In these writings, it is thought to be necessary to refrain from presupposing categories guaranteed with some substances when we discuss resistances. In this paper, I share this cautionary hesitation, because essentialism of categories is dangerous in that it neglects to watch the risk of totalitarian erasure of differences, and discuss what kinds of resistances are possible while we support criticisms of identity politics. Firstly, I discuss whether supporting the resistance that is skeptical about categories of identity means rejecting completely such categories. Secondly, I discuss the strategy that Drucilla Cornell shows. She argues that the metaphorical refiguration of "Women" is needed while accepting deconstruction of categories. Thirdly, I discuss some possibilities of parody as a resistance, which is the strategy that Butler offers in *Gender Trouble*. And I examine relations between Cornell and Butler. Through the whole, I do a preliminary discussion to think possibilities of society accepting diverse differences.

1. はじめに

性に関わる差別や排除に対する抵抗のあり方として、アイデンティティ・ポリティクスは、記述的な意味においても、また規範的な意味においても、典型的なものとされることがある。他方で、こうしたアイデンティティ・カテゴリーに依拠した抵抗のあり方は、批判的に精査されるべきものであるという見解も存在する。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程（ジェンダー・セクシュアリティ論）

ことに、ミシェル・フーコーの『性の歴史』1巻刊行以来、アイデンティティへの回帰を唱える言説に対しては、つねに批判的まなざしが向けられてきた。また、フェミニズム研究やセクシュアル・マイノリティ研究において、この流れは、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』刊行以来、急速に加速された。規範的なセックスやセクシュアリティ、ジェンダーに合致しない生への抑圧に対する抵抗の準拠点として、実体によって裏書されているカテゴリーを想定し、抵抗を論じることには、躊躇が伴われてしかるべきとされるようになった。

本稿では、こうした躊躇が必要な配慮であるという立場をバトラーらと共有しながら以下の点について論じていく。1) アイデンティティ・カテゴリーに批判的な抵抗とは、アイデンティティ・カテゴリーの完全棄却であるのか。2) バトラーが『ジェンダー・トラブル』で論じた抵抗としてのパロディの可能性とはいかなるものか。3) バトラー同様にポスト構造主義的立場からアイデンティティ・カテゴリー批判をおこなうドゥルシラ・コーネルが提唱する抵抗の戦略（大文字の女性の再形象化）とはいかなるものか。4) バトラーの抵抗とコーネルの抵抗の関係とはいかなるものか。これらをもって、多様な差異を迎え入れる社会の可能性を呈示するための予備的考察をおこないたい。

2. アイデンティティ・カテゴリーの外部と批判的非主体化

男性、女性、異性愛者、同性愛者、こうしたカテゴリーが、自己、および他者を理解するにあたり、必要不可欠なものであり、それがなければ、社会的存在自体の確実性が溶解してしまうようなものであるとすれば、同語反復的な言い方になるが、そうしたカテゴリーは、「主体」の存立にとって不可欠なものと言えるだろう。フーコーが述べるように、特定の性の位置へと呼びかけられることが「主体」の成立に先立つのであれば、「主体」の成立とは、呼びかけへの隷属化に他ならない。それゆえ、特定のアイデンティティ・カテゴリーによる自己叙述は、自己の本質を把握し記述する純粋な意識の作用の結果によるのではなく、どのような性が規範的であるのかが予め刻印された言説の内部への従属化において遂行されていると理解しなければならない。

異性愛主義と性差別を前提とした「男性」「女性」という分類にしたがって自己の本質が規定される近代社会において、アイデンティティ・カテゴリーは、二律背反的だ。女性や同性愛者への同一化は、それぞれそれらと二項対立的に想定されているアイデンティティに対して、劣位な項としての位置どりを引き受けるという危険を冒すことだ。しかし、バトラーが言うように劣位の項であっても、それがアイデンティティを与えてくれるという理由において社会的次元における存在を約束してくれるかもしれないがゆえに、その項は、自己の本質を示すものとして引き受けられる可能性がある (Butler 1997)。性差別や異性愛主義が刻印された言説にとって「女性」や「同性愛者」は、「主体」としての十全の表象を与えられない、理解不可能性の領域に属するものなのだが、しかし、そうした社会的名称すらは、理解可能性への参入を争う準拠点になりうるのだ。

対照的に、社会的名称への従属化が社会的存在の保証の条件となっているアイデンティティ体制においては、劣位のアイデンティティすら放棄することは、別の水準の不可能性において生きることを意味すると言えるだろう。ゆえに、そうしたアイデンティティ・カテゴリーの放棄、つまり、アイデンティティ不在の位置は、究極の不可能性と言うことができるかもしれない。

フーコーのある記述は、アイデンティティ不在の位置にアイデンティティ体制の彼方を見出している。インターセクシュアルと現在であれば理解されるであろうエルキュリーヌ・バルバンという 19 世

紀の人物が残した手記の中にフーコーが見出した、性別カテゴリーを超越した幸福な姿、「性的な自己同一性の不在が漂流するときに発見し、惹き起す甘美な快楽」(Foucault 1980=2001: 307) という表現は、アイデンティティの外部にユートピアを見出すものであると言えよう。それでは、こうした性別を超越した姿に、解剖学的性別や、性的対象の選択について、単一のカテゴリーが割り振られるべきとされる近代的体制からの解放の目標を求めることはできるだろうか。

フーコーは、近代社会に広がる知と権力のあり方を、生-権力という言葉で表現した。生-権力が依拠する真理の枠組みにおいては、全ての住民の「身体と快楽」は近代特有の医学的・行政学的概念によって産出されたセクシュアリティという枠組みにおいて把握されなければならない。セックスは、セクシュアリティにとって常に参照されるべき記号となる。生-権力下において、各住民は、自己の真理としてセックス-セクシュアリティを引き受けさせられ、その形態にしたがってマイクロかつマクロに管理される。ゆえに、フーコーは、セックスもしくは、セクシュアリティの本当の姿こそが、解放を導く権力の彼方であるとする解放主義の言説を次のように皮肉ったのだ。「この装置〔セクシュアリティの装置(筆者補足)〕の皮肉とは、そこに我々の『解放』がかかっていると信じこませていることだ」(Foucault 1976=1986: 202)。フーコーは「セクシュアリティの装置に《反撃》する拠点は、〈欲望である性〉ではなく、身体と快楽である」と言う (ibid.: 199)。

バトラーが指摘するように、『性の歴史』の記述の仕方に、彼が言う「身体と快楽」を、前-言説的リビドーとして理解させる傾向があることは否定できない。バトラーによれば、バルバンについてフーコーが述べた「アイデンティティなき幸福な中間状態」という理想において、この傾向は決定的に露呈している。バトラーは、ここに解放主義的な言説の危険と同様のものを読み取る。こうした理想化は、「形而上学の次元で多層的なセクシュアリティを物象化」(Butler 1990=1999: 179) することに手を貸すことになるのだ。

しかし、バトラーとて、アイデンティティ不在の位置、アイデンティティの外部ごときものについて、一切語らないわけではない。アイデンティティ体制にとっての究極の不可能性とでも言うべきものについてバトラーは、次のように言う。

法が見かけほど強力でないことを暴くために、そのような振り向きが必要とするのは、存在しないことを選択する意志——批判的な非主体化——である。言語の内部で生き残ることは、この非主体化された領域においてどんなかたちをとるのか。(Butler 1997=2000: 99)

ここでの法とは、狭義の意味での法、つまり、権利・義務を定めた実定法や慣習法に言及しているというよりは、それらを含めた広義の言説上の強制的禁止や命令であり、また、精神分析における禁止、フーコーが言う権力の産出的機能と重ねて用いられている。「言語の内部で生き残ることは、この非主体化された領域においてどのようなかたちをとるのか」。バトラーはこの問いに、今は答えられないと言うが、法からの呼びかけに還元できない「潜在力」としての「存在」に希望を託すのである。

そのような呼びかけの失敗は、自己-同一的であるという意味における主体の「存在」能力を削ぐことになるだろうが、それでも、さらに開かれていてさらに倫理的な存在——未来の、未来のための存在——への道を示してくれるかもしれないのである。(ibid.: 100)

この「倫理的な存在」とは、アイデンティティ・カテゴリーから自由な潜在的状態であろうか。そうではない。そうだと考えるならば、バトラー自身が批判した「アイデンティティなき幸福な中間状態」を再演してしまうことになる。重要な点は、このあらたな存在の可能性が、呼びかけの失敗に条件づけられていると彼女が考えている点だ。つまり、あくまで、社会的名称による呼びかけが渦巻く権力関係に条件づけられながら、新たな生の可能性を模索することの必要性を彼女は述べていると考えるべきであろう。それゆえ、バトラーがいう批判的非主体化とは、社会的名称からの純粋な外部に、抵抗の始点や終点を求めるものではなく、「本物」のアイデンティティを構築しようとする言説からその真正さを剥奪するような、カテゴリーの再配備であると理解しなければならないだろう。

3. 抵抗の戦略としてのメタファーによる再形象化

バトラーは、『ジェンダー・トラブル』では、カテゴリーのパロディ的な使用によってアイデンティティ・カテゴリーの真正さを批判する必要性を論じた。それは、アイデンティティ・カテゴリーがもつ本質主義的な全体化に対する警戒によるものであると言えるだろう。しかし、特定の集団による支配を再生産する言説の効果を断ち切るためには、抵抗のためのカテゴリーに具体的形象を積極的に与える必要があるという見解もある。コーネルは、パロディによる置換とは異なる形で、アイデンティティを指示するとされるカテゴリーを、その固定的な意味作用から解放することと整合的な抵抗のあり方について述べようと試みる。

コーネルは、性差別的な視座を再生産する「ジェンダー表象システム」を改変するためには、「女性」というカテゴリーは必要であると言う。その上で、「女性」というシニフィアンが、永遠に特定のシニフィエや指示物へと固定化されぬための実践として、メタファーによる「女性」の再形象化という抵抗のスタイルに性差別的言説を変容する可能性を見出す。彼女は、バトラー同様に、アイデンティティ・カテゴリーの脱構築の必要性を前提としながら、あえて、女性的差異の特殊性にこだわるのだ。

コーネルは、ラカンの象徴界（性差別的秩序）の読みかえをリュス・イリガライの中に見出している。象徴界とは、言語の領域であり、「主体」はその法（禁止）への従属において成立するとされる。ラカンの象徴界において、欲望の主体は男性のみである。女性は、男性の欲望が投射される不完全な欠如（物、対象）でしかない。そしてその普遍的性質が言説化されることがないため、正確に言えば、象徴界の内部からは排除された位置である。それゆえラカンにおいて、真の「主体」たりうるのは男性のみである。そして、前者の男性の位置はファロスをもつ位置、後者の女性の位置はファロスである位置と呼ばれる。ラカンにおいては、この関係は固定され変容しない。

イリガライも、男性-女性という二項対立において、女性は「主体」になり得ないと主張する (Irigaray 1977=1987: 35)。男性という「主体」を形成するために自己完結した象徴界において、女性は、男性が、自己の反省性を獲得するための鏡でしかなく、男性にとって、女性は、自己に並ぶ価値をそなえた「主体」にはなりえないと言うのだ。女性は男性という「主体」が成立するためにのみ存在する「他者」でしかない。

しかし、イリガライにとって、この女性がおかれた欠如としての位置は、現行の性差別が改変されるための準拠点でもある。彼女の抵抗とは、女性が置かれた位置を逆手にとり、その位置に付与された明示的特性や暗示的特性を攪乱的に模倣することであり、それによって性差別的な象徴界の解体を目指すものである。女性は、象徴界の法によって、《女性らしさ》を遂行することを求められる。しかし、それ

は男性が成立するための鏡でしかない。ゆえに、普遍的な性質をもつ大文字の女性は、ファンタジーとしてしか到達しえない。しかし、逆に考えれば、女性がおかれた位置は、象徴界によって位置づけられながら、象徴界の表象能力のほころびが見え隠れする位置でもある。それゆえ、女性は、家父長的な象徴界において欠如でありながら、その象徴界の彼方である他なる秩序に通じる二重の位置なのである。

イリガライは、《女性らしさ》から、それゆえ象徴界からはみ出る攪乱を引き起こす「女性」の位置を「女性的なもの」と言う。この「女性的なもの」についてのイリガライの言及は、「女性」の「身体と快楽」について、本質主義的に記述していると思われるところがあるが¹⁾、しかし、コーネルは、「女性的なもの」の特殊性についてのイリガライの記述を、本質主義的に理解する必要はないと言う。コーネルは、「女性的なもの」について表象を与えようとする実践は、象徴界にとって究極の他者である大文字の女性にメタファーにおいて表象を与えようとするものであり、そのカテゴリー自体いかなる本質ももたないと言う。

コーネルが、女性的差異の特殊性を再形象化しようとするのには理由がある。男性中心的な視座においては、強制された性行為が「レイプ」として認識されないような世界において、もしくは、胎児の権利の名のもとに自己の身体に対する管理が剥奪される危険に晒されている世界において、「女性」というカテゴリーの意義を考えなければならない。自己の身体やセクシュアリティに関して沈黙を強いられてきた女性にとって、女性についての表象が変化することは決定的な意味をもつことは否めない。自己のセクシュアリティや、母になることについて、一方的に押し付けられた意味を批判的に再解釈すること、そのあらたな解釈を、既存の表象体系の変革に使用していくことにとって、その意味内容が政治的に変更された「女性」というカテゴリーの重要性は明らかだろう。それゆえ、コーネルは、「女性的差異」が「男性的想像界あるいは男性的象徴界の中で意味＝記号化 (signify) される場合を除いては、表現されえない」「放出 (derelection)」(Cornell [1990] 1999=2003: 57) という状態を脱するために、「女性」の位置に立たされる者が自己のセクシュアリティや愛を謳歌しうる女性的差異の特殊性に関する「いまだ…ない」ユートピアの必要性を提唱するのだ。

重要な点は、コーネルの目標が、単に女性の社会的可視性獲得以上のものにある点だ。彼女にとって、象徴界において、女性が普遍的な地位を獲得することが目標なのではない。むしろ、彼女の目標は、象徴界がその一貫性を保持しようとするときに他者を不可避に産出するという構造自体を批判的に検討することであると言える。ゆえに、コーネルは、女性的なものについての文体に「他者性との倫理的関係」という希望を見出すのである。女性的な文体の「模倣 (ミメーシス)」の戦略は「わたしたちがわたしたちについての彼らとのメタファーと関わり合い、メタファーの中に含まれていないもののまさにその過剰ゆえに新たな意味をあたえるべく、ジェンダー・ヒエラルキーの内部で動くことのできるようになる方法」なのだ (Cornell [1990] 1999=2003: 328-329)。コーネルが女性的差異の特殊性についての再形象化にかける政治的・倫理的意図とは、単に、女性の地位の回復ではない。家父長的なジェンダー表象システムが、いまだにふくみえない「残余」を「残余」のままに汲み取ろうとする新たな表象と政治の可能性に彼女はかけるのだ。それは、現行のジェンダー表象システムの自己同一性を拡張することによって含み得ない過剰を飼い馴らすことではない。それゆえ、コーネルの「女性的なもの」の文体への期待は二重である。ひとつは、ジェンダー表象システムの「残余」への配慮へとつながる「境界域」としての役割に対する期待であり、もうひとつは、他なる秩序における「女性的差異」の謳歌である。

しかし、こうしたメタファーに見出された「いまだ…ない」が常に、平和裡に、主体-他者の主人-奴

隷的構造を避けられるという保証はない。メタファーは、ときに、暴力的に「われわれ」を構築する。コーネル自身も認めるようにメタファーは、特殊なものが本質的なものとしての地位を占める際に用いられる用途でもあるのだ。それゆえに、コーネルは、「女性的なもの」についての語りが本質へと転落せぬように予防線をはらなければならないということを認めている。ことにコーネルの議論に、「ジェンダー表象システム」にとって到達不可能な「いまだ…ない」大文字の他者への敷居＝入り口を、「大文字の女性」についての言明に限定する傾向を認めるとき、この危険は明らかのように思われる。それゆえ、「女性的なもの」が、言語のもつ過剰性への配慮の位置から後退し、すべての女性たちを説明し、そうでないものを弁別する唯一の中心となることを防止するために常に、カテゴリーを異議申立ての契機に開かれたものにしておくための策が必要になる。それゆえに、こうした境界域や、他なる秩序は、「女性的なもの」でしかないのか問い、そして、異議申立てを可能にする地平はいかに開かれるのを明らかにしなければならない。

『脱構築と法』が最初に書かれたとき(1990)、コーネルは「女性」にとっての他者について詳細に言及しなかった。しかし、こうした他者について考察することの必要性についてバトラーは指摘している。バトラーは、イリガライが言うような「女性的なもの」と重ねて捉えられている「他なる場所」としての「他なる場所」とはどこなのかと問う(Butler 1993: 49)²⁾。コーネルは、後に『脱構築と法』の新序文(1999)において「女性的なもの」のプロジェクトは、異性愛を規範化し、クィアな³⁾性的差異の可能性を否定する危険があるとイリガライに対する評価を後退させる。そして、本来、「主体」形成において他者を産出すると同時に排除する言説への批判は、異性愛の規範化への批判を含むものであると述べる後のコーネルの議論(Cornell [1990] 1999=2003: 16-18)が正しいのであれば、「他なる場所」について言及するとされる「女性」というカテゴリーにつきまとう分離主義への圧力が引き起こす、「他なる場所」にとっての「他なる場所」の抑圧に対する配慮は不可欠だ。

しかし、同様に、しばしば異性愛と重ねて理解される「女性的なもの」が産み出す外部(残余)への言及が、同様に、自己と非-自己を弁別するための中心人物を新たに産出する危険から自由ではないこともまた明らかである。「女性」というカテゴリーにとって、ときにクィアな他者である「同性愛者」というカテゴリーも、同様に他者産出に関わる危険を冒すのだ。バトラーは、M. ウィティッグの議論を検討する文脈において、異性愛主義の言説から排除されている同性愛者の言葉を分離主義的に神話化することを批判している。言語による節合の結果が構造的に脱構築される運命にあることを前提としているコーネルのメタファーによる再形象化と、そうした前提を有していないウィティッグの議論を同一視するつもりはないが、革新的とされるメタファーも、そうした当のメタファーが出現するにあたり対抗した言説が冒す危険を免れるものではないことを知るために、バトラーのウィティッグ批判をここで紹介したい。

面白いことにウィティッグは、同性愛者であることが「現実」を構築している強制的な統語法や意味論に異を唱えるものであるかのように、同性愛者の視点と比喩的言語のあいだに、必然的な関係を置こうとする。同性愛者の視点は、(そのようなものがあるとして)現実から排除されているゆえに、現実がそもそも一連の排除、現れ出ることのない周縁、姿をあらわさない不在によって構築されていることを当然理解するものだという。だが、それと同じ排除の手段をつかってゲイ/レズビアンアイデンティティを構築するとしたら、それは何という悲劇的な過ちとなろう——あたかも

ゲイ/レズビアンアイデンティティの構築には、排除される者がその排除自体によって前提とされ、さらには必要とされることが常ではないかのように。(Butler 1990=1999: 226)⁴⁾

バトラーのこの批判は、いかなるカテゴリーも排除によって設立されるとみなす必要があることを指摘するものである。彼女は、比喩的言語よりも「狡猾な戦略がある」と言う。それは、アイデンティティ・カテゴリーを「完全に奪いとり、再配備する」ことだ (ibid.: 227)。アイデンティティ・カテゴリーの攪乱的使用の増殖は、男性-女性の二元性⁵⁾を無意味にするほどに、カテゴリーがもつ批判を封じる力を脱本質化する (ibid.: 257)。セックス、セクシュアリティ、ジェンダーの一続きの一貫した連続体を、カテゴリーの強制的な引用の反復の内部から局所的に置換し、結果、性差別、異性愛主義の言説の中心人物である男性-女性から、そのアウラを剝奪しうるかもしれない。この可能性の中にバトラーは、抵抗の方法と目標を見出すのだ。

4. 抵抗の戦略としてのパロディ

性差別と異性愛を前提とした二つのラインに沿った性の存在論は堅固なものに見えるが、その外見にもかかわらず、それは、常に異議申立ての契機に晒されていると考えることもできる。そうした存在論は、権力と言語の歴史的な結びつきがもたらした効果であると理解することは、その形而上学の前にひざまづくことの必然性を疑問にふすことへとつながる。バトラーが指摘するように、禁止の反復を強要することによってしか、こうした存在論はその起源としての地位を確保しえないのではないかとみなすこともできるよになる (Butler 1993: 51)。こうした視座は、性の「正しさ」を保証する起源たるアイデンティティなど、そもそも存在しないのではないかという批判精神をもたらすものだ。この精神に宿る認識は、理想的な身体を約束してくれはしないであろうが、身体や性的差異の様々なあり方、生の様々なあり方を、迎え入れるための前提となるものであろう。もはやそうした認識においては、ある身体と他の身体は同じく理想的でも、欠陥的でもないからだ。バトラーが言うパロディの攪乱的なパフォーマンスヴィティは、こうした認識を切り開くことをもくろむものであると言えるだろう。

例えば、ファロスを持つ位置-ファロスである位置と同一視された男性-女性の位置を、起源として産出する言説にとって、そうした位置を遵守しない個々の単独の形象が、抑圧された理解不可能な領域から、不適切にも理解可能性の領域へと境界を侵犯しようとするとき、この予期せぬ非合法的な性的差異の出現は、正統的な言説の一貫性を不安定なものにする効果があるだろう。バトラーは次のように言う。言説が自己基礎づける体系的な一貫性を構成するさいに生み出される「外部」を、体系の「内部」において完全に表象しようと述べることは、「外部」を「内部」に同化させることである。むしろ、バトラーは、この「外部」は、言説の一貫性が不可避に依拠する創設的暴力 (founding violence) が、克服されていく「未来の地平」として再形象化されなければならないと言う。同時に、この「外部」は「特定の真理枠組みにおいて含み得ない不透明性が、言語の不適切さと表象不可能性という破壊的な場として働くところ」、「限界に言語が出会うところ」として、消去されてはならないと言う (ibid.: 53)。ならば、ファロスをもつ「男性」やファロスである「女性」を攪乱する、予期せぬ性的差異の出現がもたらす個々の不協和音は、内部へとりこまれることによって解消されるべきものではなく、内部の一貫性維持のために行使される認識上の暴力が告発される「外部」としてあくまでその不安定化する効果として保持されなければならない。

バトラーは、『ジェンダー・トラブル』では、パロディがもつ起源に対する異化効果に大きな期待を寄せた。「正しい」男性-女性のパロディは、セックス、セクシュアリティ、ジェンダーの恣意的ながらヘゲモニックである結合に依拠した男性-女性の「正しさ」を、その正統性を故意に誇張したり、無視したりすることで不適切に反復する。一貫したアイデンティティを保証するために動員される諸要素の一連の結合を、様々な組み合わせにおいて解きほぐし、もはや、カテゴリーとアイデンティティの一貫性を唱えることがジョークでしかないと思われるほどに、その結合を脱自然化する。そして、バトラーはこうしたパロディがもはや笑いも引きこさぬパスティーシュになるとき、男性-女性の「正しい」マトリクスは崩壊するかにように述べた。

しかし、こうした正統な男性-女性に結びつけられた諸要素を攪乱的に置換していく戦略であるパロディが、諸謔性や規範への反抗を秘めたものでなくなる状況（パロディがもはやパスティーシュでしかない世界）へと一気に跳躍しようとするのは、明らかに、誤りだ。それは抵抗の始点を法の強制力がない世界に定める誤った前提を招き入れる。『ジェンダー・トラブル』の笑いや冷笑の強調は、そうした短絡を引き起こす可能性があるが、その後のバトラーの著作とともにこのパロディを考えれば、パロディは単なる楽観や冷笑ではないと理解できる。

抵抗としてのパロディの可能性は、その正統さを制裁をもって強固にする言説の権威との関係の内部から考えなければならない。このとき、パロディは恐怖と隣り合わせの笑いであるということを理解しなければならない。というのも、パロディがおこなう性的に「正しく」ない位置への同一化は、「正しい」自己（規範的な「男性」や「女性」）へと主体化する過程において、己が抑圧した禁止された同一化の可能性に直面することを伴う。そして、己以外の者にとっても、同様の論理から、理解可能な自己像を形成するために棄却された外部を呼びおこすものであるがゆえに、恐ろしい経験であると言える。笑いだけが渦巻く楽観から解き放たれたパロディがもつ批判的力とは、自己-同一性の抱える構造的困難を浮き彫りにするものなのである。

フロイトを解釈しながらバトラーは次のように言う。

禁止によって強制される〔自己の起源からの（筆者補足）分離という条件においてのみ、禁止への固着によって（禁止への従属において、そして、その禁止を官能化しつつ）形成されながら、主体は出現する。そして、この禁止は、主体が精神病へと溶解してしまうことを防ぐ自己愛的な迂回路に組み込まれているがゆえに一層模範的なものなのである。（Butler 1997: 103）

「主体」は、法の禁止への従属においてのみ成立する。それ以前の自己の起源を「主体」は正確にはしりえない。ただ言えることは、禁止への従属は社会的存在を可能してくれると言うことだ。この自己愛的迂回路は、創設的暴力が産出する外部への放逐を防ぎ、社会的な能力を備えた「主体」であることを保証するものである。そうした「主体」には、常に真の「主体」と擬似の「主体」という区別が存在しているにせよである。それゆえに、この迂回路を断ちきることは、いわば、狂気へと続く入り口であるといえる。狂気において、人は、もはや、自己-同一性という観点においては、「主体」としての能力をもちえない。性的アイデンティティを備えることにおいてのみ、「主体」として自己理解及び他者からの承認を認可する社会においては、そう述べるられるだろう。しかし、性的アイデンティティとは、理解可能性の外部へと「主体」がはみ出ないように相互に監視しあう監獄であるとも言える。バトラーが言

うパロディとは、「精神病」という比喩において彼女が述べる理解不可能なものが放逐される「外部」へと、(非)主体化を遂げてしまった結果を、あえて引きうけることであると言えるのではないか。

もしも、パロディが、強制的規範化への抵抗ではなく、「普遍」に値する社会的名称を実は己れも所有する資格があるのだと主張することになれば、新たに生じる危険は明らかだ。パロディがいつのまにか本物であると名乗りだしたならば、新たな起源の創出に加担することになる。それゆえ、批判的であるパロディとは、「アイデンティティのカテゴリーが——たとえどんなものであれ——永遠に問題がらみのものだというを示す」(Butler 1990=1999: 227)⁶⁾ために行われなければならない。予期せぬ置換が産出する性的差異の馴化されえなさにこそ、パロディの攪乱的なパフォーマンスティヴィティはあるのだ。

竹村和子は、正義が履行される瞬間とは、狂気が出現する瞬間であると述べた。言説化可能な領域において、形を与えられない生は、表象不可能なものとして外部を形成する。この構成的外部に、表象を与えようとすることは、現行の法においては、指示することが不可能な領域に表象を与えようとする自己矛盾をはらんだ行為である。そして、無意識に放逐されている生の可能性を指示しようとするときの言葉は、狂気じみたものである。しかし、こうした狂気は、現行の言説が、その生存の可能性を剥奪した生が、正義の履行を求めて異議申立てをおこなう際の現れ方なのだ(竹村 2002: ch. 5)。

バトラーもコーネルも、この意味においてともに正義/狂気に関わっていると言える。両者は、ある言説がその一貫性を保持するために産出する「外部」をいかに再形象化するかという関心に貫かれている。また、「外部」の再形象化は、性のヘゲモニーが改変されるための「未来の地平」であるという点においても共通している。が、その際、コーネルとバトラーがとる抵抗の戦略は異なる。かたや、大文字のカテゴリーについてのメタファーによる言及に、かたや、いかなる中心をも拒否しようとする置換による局所的介入に、抵抗の戦略を見出す。

それでは、両者の抵抗のあり方は相対立する関係なのか。それとも、相補的なものなのか。筆者の理解では後者である。コーネルが『脱構築と法』で示した大文字のカテゴリーへのこだわりは、すべての女性たちを包摂する普遍的な記号や指示対象をもとめるものではない。むしろ、男性的秩序において表象されない究極的な他者であるがゆえに、コーネルは、他なる場所への触媒として、大文字の女性にこだわったのである。さらには、コーネルの政治的目標は、いわゆる大文字の政治が必要とする大文字のカテゴリーに積極的に形象を与えることにあったことも忘れてはなるまい。とはいえ、大文字のカテゴリーが、究極的に表象不可能なものとして、到達しえぬ何かという形で中心性を帯びるとき、新たな形而上学の色合いを帯びることは否めない。

他方で、バトラーは、他なる場所への敷居はなにも、不可能な大文字のカテゴリーばかりでないことを教えてくれる。不可能なものとして、総体性をもった身体を与えられていない(与えようともされていない)個々の不可解なものには、言説の創設的暴力が産みだす「外部」を露呈させ、「内部」の安定性をゆさぶる批判的力があるのだ。とはいえ、バトラーとて『偶発性・ヘゲモニー・普遍性——新しい対抗政治への対話』において、カテゴリーの普遍性について言及することの意義は否定し得ないことも認めている。バトラーも、実際の政治において総体性がカテゴリーに付与されていく過程を否定できないのだ。バトラーの攪乱的パフォーマンスティヴィティはあくまで、個々の不可解なもの側に立つものである。しかし、そのことは、集合的なカテゴリーを棄却しようとするものではなく、むしろ、それが、普遍と称する具体的形象を獲得しようとする磁場において、カテゴリーの意味や指示性の最終的な固定化

を遅延させようとするものなのだ。

5. おわりに

本稿は、カテゴリーの脱構築を前提とした抵抗のあり方を論じてきた。制度論には、こうした議論は無駄なのか。本質と対応するカテゴリーなしに社会の制度を組み立てることは困難に思われるかもしれない。現在の社会制度をめぐる議論にはそうした傾向をもつものがある。が、本質に値する差異のリストを増加させることによって社会が直面する多様性に対応する方法の模索では、カテゴリーの変容の可能性を論じるには不十分である。このとき、『社会』は言説の妥当な対象ではない。さまざまな差異からなる場全体を固定する——それゆえに構成する——単一の基礎原理などない」というラクラウとムフの言明 (Laclau & Mouffe 1985=2000: 178) を思い出すことが重要だろう。自律的差異とそれを包摂しうる全体という想定では差異の自律化が産出する排除への配慮を消去することになる。カテゴリーの脱構築を前提とした抵抗についての議論は、この配慮を保持し、制度が前提とするカテゴリーの終わらなき変容の可能性についての考察なのである。

注

- 1) イリガライは「女性的なもの」と「物質」「感覚」「肉体」との結びつきを強調する (Irigaray.: ibid: 93)。
- 2) このバトラーの着想の重要性は大貫挙学の指摘による。
- 3) 「クィア」は、もともと「おかま」「ホモ」という意味の蔑称。近年、欧米において、この「クィア」は、異性愛主義を批判する位置を示すためにあえて用いられることがある。一般化すれば、規範に対して抵抗する対抗的な位置を指す言葉とも言える (Halperin 1990=1997: 98)。
- 4) 引用者一部改訳, Butler [1990] 1999: 163 を参照。
- 5) 二元論と言っても、実質的な中心人物は男性だとすれば女性には () をつけるべきかもしれない。
- 6) 引用者一部改訳, Butler [1990] 1999: 163 を参照。

参考文献

- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge.=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』, 青土社。
- , 1992, “Contingent Foundations: Feminism and the Questions of “Postmodernism””, Joan W Scott eds., *Feminist Theorize the Political*, Routledge.: 3-21.=2000, 中馬祥子訳「偶発的基礎付け——フェミニズムとポストモダニズムによる問い」『アソシエ』3: 247-82.
- , 1993, *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of “Sex”*, Routledge.
- , 1997, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, Stanford.=2000, 井川ちとせ訳(抄訳4章), 「良心がわたしたちをみな主体にする」『現代思想』28(14): 84-103.
- [1990] 1999, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge.=2000, 高橋愛訳(抄訳序文), 『現代思想』28(14): 66-82.
- , Ernesto Laclau and Slavoj Zizek, 2000, *Contingency Hegemony Universality: Contemporary Dialogues on the Left*, Verso.=2002, 竹村和子・村山敏勝訳, 『偶発性・ヘゲモニー・普遍性——新しい対抗政治への対話』青土社。
- Cornell, Drucilla, [1990] 1999, *Beyond Accommodation: Ethical Feminism, Deconstruction, and the law*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.=2003, 仲正昌樹監訳, 『脱構築と法——適応の彼方へ』お茶の水書房。
- , Judith Butler, Pheng Cheah, and Elizabeth Grosz, 1998, “The Future of Sexual Difference: An interview with Judith Butler and Drucilla Cornell” *diacritics* 28-1 (Spring 1998), The Johns Hopkins UP=2000, 坂場純子訳, 「性的差異の未来——ジュディス・バトラーとドゥルシラ・コーネルとのインタビュー」『現代思想』28(14): 126-153.

- Foucault, Michel, 1976, *Histoire de la sexualité vol. 1: La volonté de savoir*, Gallimard.=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I ——知への意志』新潮社.
- , 1980, "Le vrai sexe", *DITS ET ÉCRITS*, Gallimard.=2001, 小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編/渡辺 守章・蓮實重彦監修「両性具有者と性」『ミシェル・フーコー思考集成 第8巻 政治 友愛』筑摩書房.
- Halperin, David M., 1990, *Saint Foucault: Towards a Gay Hagiography*, Oxford UP.=1997, 村山敏勝訳『聖フーコー——ゲイの聖人伝に向けて』太田出版.
- Irigaray, Luce, 1977, *Ce Sexe Qui N'en Est Pas Un*, les éditions de Minuit=1987, 棚沢直子, 小野ゆり子, 中島公子訳, 『ひとつではない女の性』, 勁草書房.
- Laclau, Ernest and Mouffe, Chantal, 1985, *Hegemony and Socialist Strategy*. Verso=2000, 山崎カヲル・石澤武訳, 『ポストマルクス主義と政治』大村書店.
- 竹村和子, 2002, 『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店.